〈その他〉

地域社会において看護機能を推進する能力育成をめざした研究科 “看護機能推進演習”の取り組みと成果

Graduate School of Nursing aims to develop the ability to promote nursing functions in the community
The initiative and results of the "Nursing Function Promotion Exercise

伊東真理[1]　阿部恭子[1]　篠木絵理[1]　田久保由美子[1]　土肥眞奈[1]　渡邊章子[1]
藤巻郁朗[1]　宮本千津子[1]

1　東京医療保健大学　千葉看護学部　看護学科

Mari ITO[1], Kyoko ABE[1], Eri SHINOKI[1], Yumiko TAKUBO[1], Mana DOI[1], Akiko WATANABE[1],
Ikuro FUJIMAKI[1], Chizuko MIYAMOTO[1]

1　Division of Nursing, Chiba Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

要　　旨：目的：千葉看護学研究科における看護機能推進演習の取り組みとその成果を報告し、今後の課題について検討する。
方法：看護機能推進演習における「科目概要および到達目標」、「授業スケジュール」、「取り組みの実際」、「履修後の授業評価」等から、その取り組みと成果を考察した。
結果：履修者は活動事例の検索および選定の他、関連資料の収集や分析、学修成果の発表等を通じて、看護独自の機能への理解を深め、成果を「示す」能力の獲得等につなげていた。
まとめ：今後は、授業評価等の結果を踏まえ、指導体制を整えていくことが課題である。引き続き、履修生からのフィードバックや本科目に携わる方々の意見を基に、授業方法の工夫および改善を継続していく。

Abstract：**Objective:** To report on the initiatives and outcomes of the Nursing Function Promotion Exercise at the Chiba Graduate School of Nursing, and to examine future issues.
Methods: The initiatives and results of the nursing function promotion exercises were examined from the ‘course outline and achievement objectives’, ‘class schedule’, ‘actual activities’ and ‘post-course evaluation’.
Result: Students deepened their understanding of nursing's unique functions and acquired the ability to ‘show’ results through searching and selecting case studies of activities, collecting and analysing related materials, and presenting the results of their studies.
Conclusion: In the future, the challenge is to improve the teaching system based on the results of class evaluations, etc. We will continue to devise and improve teaching methods based on feedback from students and the opinions of those involved in this subject.

キーワード：大学院教育、看護機能推進、地域社会、能力育成

Keywords：graduate education, Care Functionality Advancement, Community Society, Capacity Building

Ⅰ．はじめに

東京医療保健大学は、2021年度に千葉看護学研究科（修士課程）を開設し、2022年度に初めて修了生を送り出した。千葉看護学研究科（以下、本学研究科）では、高度専門職業人として組織・チームでの実践を、牽引・指導する知識とスキルを講義・演習・研究を通じて提供している。また、地域包括ケアの時代において、多職種と連携し、看護独自の機能を推進する際の基盤となる科目をコア科目としており、看護機能推進演習はこうした本学研究科における必修科目に位置づけられている[1,2]。そこで本稿では、本学研究科における看護機能推進演習（以下、本科目）の取り組みとその成果を報告し、今後の課題について検討する。

Ⅱ．科目の概要

１．科目概要および到達目標

１）科目概要

主だった内容は、地域包括ケアシステムにおいて保健医療を必要とする人々へのサービス活動を整理してデータとし、看護独自の機能を分析、考察すると共に、当該活動の企画から実施までを評価し、改善計画を立案することである。

２）到達目標

本科目の到達目標は以下となる。

（１）地域包括ケアシステムにおいて保健医療を必要とする人々へのサービス活動に参加し観察することができる
（２）観察データをもとに、看護独自の機能を分析、考察することができる
（３）活動の企画から実施までを評価し、改善計画を立案することができる

２．学位授与方針との関連

本学研究科の学位授与方針は以下となり、本科目は（１）（２）に位置づけられている。

（１）多職種・多領域で担うケアシステムの構築・維持・発展において、常に、看護の本質を「掴む」能力。
（２）高度に機能分化したケアシステムを俯瞰し、多様な背景をもつ一人ひとりに必要な保健医療福祉機関、人びと等を、あらためて「繋ぐ」能力。
（３）地域社会における看護機能を推進するための研究リテラシーを獲得し、社会実装に向けて研究を実施し、成果を「示す」能力。

３．開講時期、履修者数

２単位の必修科目であり、１年後期セメスターにおいて、土曜日を中心に開講した。履修者数は、2021年度は９名、2022年度11名、2023年度10名であった。

４．看護機能推進特論との関連

本科目は、看護独自の機能を多様な連携において、活用・構築・促進する意義と方法について学ぶことを主眼としている、看護機能推進特論（本学研究科１年前期セメスター開講科目）の学修を統合・発展させる内容となっている。そのため、看護機能推進特論での学びを自己評価し、課題を明確にしておくことを事前学習（留意点）とした。

５．授業スケジュール（表１）

本科目の授業構成は全15回に貫かれ、課題事例（以下、事例）の探索、事例検討に必要な資料収集、収集した資料の分析・評価、最終発表準備とプレゼンテーションの構成にて、当該活動の企画から実施までを評価し、改善計画の立案を試みた。

また、参加観察する中で、必要な情報収集を進めることを到達目標としていたものの、コロナ禍での開講となったため、必要な分析・評価用の授業資料（以下、授業資料）は、公開されている資料を用いた。

その後、船橋キャンパス内にて開催される地域交流イベントにおいて、学修成果を発表した。尚、地域交流イベントとは、大学近隣に住む地域住民に本学を知ってもらい、本学と地域とのつながりをより強めることを目的として開催しているイベントとなる。

Ⅲ．取り組みの実際

１．授業の進め方

授業はインターネットを使用した遠隔授業にて進行した。実際には、履修者を２グループに分け、グループワークやファイル共有等をMicrosoft Teamsを使用して実施した。また教員はグループごとに担当を定め、常時３－４名がグループワークに同席し、補足説明や質問等の対応を行った。

２．課題事例の検索および選定

2022年度は履修者個々が検索した事例から選定を進め、千葉県船橋市（船橋在宅医療ひまわりネットワーク）、千葉県松戸市（松戸プロジェクト）を取り上げた。

2023年度は、教員があらかじめ選定した複数の事例から、履修者各自が検討したい事例を選定する形式に変更し、東京都江東区、奈良県生駒市を取り上げた。

表1　看護機能推進演習　授業内容

実施回	主な内容
1回	・授業および課題学修の目的と方法の説明 ・課題事例の評価・分析の視点と枠組みの説明 ・介入ケースの提案
2回	・活動事例に関して収集した情報の共有
3回	・活動事例に関して収集した情報の共有 ・活動事例の分析
4・5回	・活動事例の分析 ・分析に必要な追加情報やデータの収集（必要時フィールドワーク）
6・7回	・多職種／他機関連携に関する介入ケースの分析
8・9回	・活動事例について収集した情報やデータの整理と分析・考察①
10回	・プレゼンテーションとディスカッション①(中間発表)
11回	・データ分析・考察②
12・13回	・データ分析・考察② ・最終発表の準備
14回	・プレゼンテーションとディスカッション②(最終発表)
15回	・まとめ

選定する際の要件は以下となる。

事例選定の要件：

1）地域包括ケアに関連しており、看護職を含む多職種で連携と協働を実践している事例であること（活動の場は病院・地域・施設を問わない、事例の対象は個人でも組織でも可とする）
2）看護独自の機能を考察できる事例であること
3）公表されている事例であること
4）分析評価に必要な情報や資料が入手可能な事例であること

3．授業資料の収集および分析

必要な授業資料は、履修者各自が分担を決め、収集を進めた。主だった内容は、論文や自治体の公開資料・事業報告集などの資料、動画共有サービスや活動紹介映像等から収集した映像であった。また事例の評価分析の枠組みには、Donabedian[3)]の質保証の枠組みを使用した。授業資料の分析項目は、「事例における連携の目標」、「連携の促進要因および阻害要因」、「連携の不足に対する対策案」の他、看護独自の機能をより詳細に分析するため、「看護が果たした機能」、「看護が果たせる機能」等とした。加えて、事例の概要として、「どのような経過であったか」、「どのような連携がなされていたか」、「関係する職種は何であったか」等も記載する構成とした。

4．最終発表準備とプレゼンテーション

発表準備は各グループで実施し、中間発表の機会を設けた後、最終発表会を授業内で実施した。プレゼンテーションの時間は、各グループ40分（発表20分程度、質疑応答20分）とし、パワーポイント資料を用いて発表した。発表に含める項目は、「事例概要」、「対象とした事例の連携目標」、「活動の経過」、「看護機能の考察」、「改善策の提案」等であった。また、最終発表会は、開催日時を全教員に配信し、科目担当者以外も参加できる場として開催した。

5．多職種／多機関連携に関する介入ケースの分析

2023年度より、事例検討の他、履修者各自の実践経験から、看護独自の機能についての理解を深めるため、多職種／多機関連携において看護が役割を果たした介入ケースを提案し、その内容を分析する演習を行った。

Ⅳ．授業での学生の学び

１．事例分析による看護独自の機能等の考察

2023年度の取り組みについて要約し記載する。

１）まず､江東区地域包括全体会議を取り上げたグループは、当該地域の政策目標のうち、「障がい児も高齢者も安心して生活ができる体制づくり」に焦点をあて、分析を行った。

本グループでは、多職種連携に焦点を当て分析した結果、地域連携において看護師が役割を拡大し、障がい児・高齢者共に、対象の早期発見と早期介入、およびこれによる対象の生活範囲の拡大が可能となっていたこと、加えて、関連の看護職が所属する機関それぞれで他職種を巻き込み、看護職以外の人材育成を行っていたことが発表された。

さらに果たせる看護独自の機能としては、所属機関ごとに、専門看護師等のより質の高い看護師を養成すること、ICTを活用した地域見守りシステムを提案していくこと、これにより、対象の健康上および生活上のアセスメントとリスクの予見を行うとともに、情報の整理と多職種への情報発信を可能とすることが提案された。

２）奈良県生駒市の総合事業を取り上げたグループは、「高齢者が、この地域で元気に協力して楽しく暮らせる」という連携の目標に焦点をあてた。

このグループでは、高齢者ケアに関する連携に焦点を当て分析した結果、看護は、高齢者の輝ける力を促進するための情報収集と、これに基づき収集した情報を活用した橋渡しができていることが整理された。

さらに果たせる機能としては、現在の事業の成果を科学的に検証し、AIの活用も含め情報発信と新しい交流の場を創設することが提起された。また、このために、病院等の公的機関だけではなく、実際に関わった職種がわかるようなシステムにし、協働して事業化、施策化を促進すること、加えて、看護の対象が病気の人だけではないことを広報し、そのためにも活動の幅を広げるよう取り組むことが提案された。

２．地域交流イベントにおける学修成果発表会

地域交流イベントにおける学修成果発表会では、最終成果を更にブラッシュアップして発表した。また発表後には、質疑応答の他、他大学における地域看護学研究者より、グループごとにコメントを依頼した。

３．発表会後の学修に関する感想

発表会後、2023年度の履修者を対象に科目全体の振り返りを兼ね､改めて授業評価を実施した。その際は、成績評価確定後web上にて実施し、結果は東京医療保健大学紀要に個人が特定されない形で開示する旨を説明し、質問や拒否を受け付ける機会をもった。2023年度の履修者を対象とした授業評価結果を､下記に記載する。

１）結果

2023年度の科目履修学生全員に質問を配信し、回答率は６割であった。

（１）学修成果発表会への参加と本科目における学修成果について

「発表会への参加が、本科目における学修成果を高める機会になったか」といった問いに対して、「ややそう思う」と回答した者は6名､「そう思う」､「あまりそう思わない」､「そう思わない」と回答した者は０名であった。

（２）（１）と回答した理由および今後の改善点等について

地域事例の探索・分析については、「地域の事例のどこに焦点を絞ればよいのかが、分かりづらかった」等の回答があった。また､グループワークについては、「複数人でディスカッションを重ねていくことで、その地域のことを深く、知ることができた」､等の回答があった。今後の改善点等については、「昨年の方達のものを見ることができたら、もっと早く理解できたのか」､「発表は、授業で発表するには適していたように思うが、地域住民を対象にした場合だと、少しわかりにくいのではないかと思った」等があった。

（３）学位授与方針の獲得に向けて、本科目が役立った点について（**表２**）

発表会後の授業評価より、学位授与方針の獲得に向けて、本科目が役立った点について感想を得た。抜粋して**表２**に記載する。

Ⅴ．考察

１．取り組みからの成果

日本看護系大学協議会は、博士前期（修士）課程で修得すべき能力[4]として「専門性の相違を尊重した上で多職種間の協働を推進する」能力を提示している。活動事例の分析結果では、看護が果たした機能として「情報収集」､看護が果たせる機能として「情報発信」を２グループ共に挙げている。看護実践において情報収集は欠くことができず、それを多職種に共有はでき

表２　学位授与方針（DP）の獲得に向けて、役立った点

DP ごとの主な回答
DP1：多職種・多領域で担うケアシステムの構築・維持・発展において、常に、看護の本質を「掴む」能力を養う
・看護独自の機能を分析することで、必要なスキルや知識を明確にすることができた ・地域にフォーカスをあて、ディスカッションを重ねていくことで、その地域のことを深く知ることができた ・多くの情報から焦点を絞りながら仕分けることでケアシステムが理解出来、本質が見えるという事がわかった ・切り口を定め、多職種の動きや関りが見えてくると、やっと看護の本質を考え始めることができた
DP2：高度に機能分化したケアシステムを俯瞰し、多様な背景をもつ一人ひとりに必要な保健医療福祉機関、人びと等を、あらためて「繋ぐ」能力を養う
・保健医療福祉を改めて考えることになり、看護職がどのように機能を発揮すべきか、という気づきを与えてくれた ・一つの地域に焦点をあて、ケアシステムの全容について複数人で検討を重ねていくことは、さまざまな視点から捉えることができ、「繋ぐ能力」につながった ・地域ケア会議をテーマとした地域事例を分析することで、自分の地域にはない多様な職域、団体が繋がりながらケアシステムを構築していることを再認識することができた ・看護師は、患者へ直接的なケアを提供するものであるといった考え方が強い印象がある。しかし、人々が抱える問題によって、各専門職に委ねること、繋ぐことも看護の大事な役割の一つであると実感することができた
DP3：地域社会における看護機能を推進するための研究リテラシーを獲得し、社会実装に向けて研究を実施し、成果を「示す」能力を養う
・多職種での話し合いの場で、患者の声を反映させた発言をすることによって、患者の満足度を上げることができ、示す力が重要なことと、事例を通して考えることができた成果を示すためには、あらゆる視点をもって分析し、深く考えることが大事だと感じた ・発表の機会が複数回設けられていたことで、グループ内での考えを他者に示すという点では、能力の獲得につながった ・まとめた成果を発表する機会をいただき、良い経験になった

ていても、自らの発信には至っておらず、看護独自の視点から発信することが多職種間で看護機能を果たすことになると理解を深めていた。

また、本科目の授業形態はグループワークを主として、展開した。履修者から得た感想において、「看護独自の機能について、メンバー間で意見交換をすることで、視野を広めることができた」等の回答があったことから、グループワークを主とした講義形態によって、履修者間の主体的な検討を発展させ、看護独自の機能への理解を深化することができたと推察できる。その他、グループワーク時に発生する履修者の疑問点や不明点には、各授業において常時、教員が返答や補足説明ができる指導体制をとっていた。「私達は先生からのアドバイスが効果的に機能出来たと思っている」といった回答からも、こうした指導体制が履修者の学修を促進する上で､効果的であったと考えられる。その他、履修者から得た感想より、「ディスカッションが考えを深めていく機会となり、結果的に看護の本質を考えるようなった。さらに『掴む』能力は、互いの考えを伝え合うことで深まっていったように思う」といった回答があった。履修者がグループワークを通じて、より主体的に授業に参加できる体制をとったこ

とは、本学研究科の学位授与方針「多職種・多領域で担うケアシステムの構築・維持・発展において、常に、看護の本質を『掴む』能力」の獲得に一部寄与できたものと考えられ、取り組みからの成果の一つと考えられる。

今回、本科目における学修成果を地域交流イベントにて発表する機会を設けた。履修者から得た感想より、「発表会への参加が、本科目における学修成果を高める機会になったか」といった問いに対して、「ややそう思う」と回答した者は6名であった。加えて、「授業内での発表も貴重であったが、その地域の人などが参加されるとより示す効果が促進されると感じている」といった回答からも、授業内における発表のみならず、学修成果を地域住民に向けて示すことによって、成果を「示す」能力獲得につなげられたものと考えられた。

2．今後の課題

履修者からの感想より、今後の改善点として、「最初は範囲が広すぎて、どうすることがいいのかとても難しく感じた。徐々に整理されてきた中で焦点を絞り、不要、必要の情報が集約出来てきた。昨年の方達のものが見られれば、もっと早く理解できたのか。時間外でかなり話し合いや分担をしたりした」、「発表は、授業で発表するには適していたように思うが、地域住民を対象にした場合だと、少しわかりにくいのではないかと思った」等があった。

こうした回答より、分析の枠組みを用いながら、多岐にわたる授業資料から、事例の中にある看護が果たした機能を整理し、さらに看護が果たせる機能を明文化するといった本科目の取り組みは、履修者にとって意義を感じながらも、時に困難感を抱く演習であったと推察できる。修了生の学修成果物の閲覧を希望する声もあったことから、今後は、修了生をオブザーバーとして授業に招き、履修者にアドバイスできる体制とするなどの工夫が必要と考える。その他、地域交流イベントにて学修成果を発表することに対し、「地域住民を対象にした場合だと、少しわかりにくいのではないかと思った」といった回答があった。この点より、地域交流イベントの来場者の特徴や会場の雰囲気、必要時発表資料の修正が可能であること等の事前説明を行い、発表者の準備性を高めておく必要性があったと考えられる。今後は、履修者から得た感想を踏まえ、より効果的に学修し、到達目標を達成していけるよう指導体制を整えていくことが課題である。

加えて昨今、看護学と社会との協働により「地元創成」に資する学術ならびに施策を構築する必要性が求められている[5)]。このような潮流を鑑みると、こうした学修成果発表の場から、新たな地元創成の仕組みづくりに寄与する討議を進めていくことも今後の課題と考える。

Ⅵ．まとめ

看護機能推進演習は、本学研究科に入学した学生が、地域包括ケアの時代において、多職種と連携し、看護独自の機能を推進する際の基盤を学ぶ上で、重要な科目であると考える。今後も履修者からのフィードバックや本科目に携わる方々の意見を基に、授業方法の工夫および改善等を継続していきたい。

引用

1）千葉看護学部ホームページ（2024.5.5 アクセス）
https://www.thcu.ac.jp/faculty/chiba/
2）千葉看護学研究科：修士課程 船橋キャンパス研究科概要ホームページ（2024.5.5 アクセス）
https://www.thcu.ac.jp/graduate/chiba/master/
3）Avedis Donabedian. 医療の質の定義と評価方法. 京都府：認定NPO法人健康医療評価研究機構（iHope International 2017；84-90.
4）日本看護系大学協議会　看護系大学院における教育の基準策定と評価に関する調査研究報告書
chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2013/12/H25MEXT-project1.pdf　（2024.7.13アクセス）
5）日本学術会議　提言「「地元創成」の実現に向けた看護学と社会との協働の推進」のポイント
https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-24-t292-8-abstract.html（2024.5.12アクセス）